慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	小説の会話表現に見られる「挨拶」と「そこからの展開」についての調査
Sub Title	
Author	佐内, かおる(Sanai, Kaoru)
Publisher	慶應義塾大学日本語・日本文化教育センター
Publication year	2014
Jtitle	日本語と日本語教育 No.42 (2014. 3) ,p.65- 81
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00189695-20140300-0065

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾大学　日本語・日本文化教育センター紀要
『日本語と日本語教育』42：65-81（2014.3）

小説の会話表現に見られる「挨拶」と「そこからの展開」についての調査

佐　内　かおる

1.　はじめに

自分が日本で一番勉強したいのは、文法練習ではなく、日本人の友人と実際に話せる話し方なのだと言う学生は少なくない。ある学生は、教室で習っている日本語では、友達と話が続かないし、何を言っているのかも聞き取れないと訴え、また、日本語の学習を始めて間もないある学生は、昼間、人に会った時は、「こんにちは」と言うと習ったが、日本人の友人は「こんにちは」とはあまり言っていない。そして、同じ人に何度も「こんにちは」と言わないとも習ったが、ではいったいどう言えばいいのかわからないと疑問を投げかけた。

初級レベルから学習段階のレベルに応じた談話教育が必要かつ重要であることは、以前から指摘されている。しかし、初級や中級前期の学習レベルを対象とした会話教材は、様々な生活場面で学習者が困らないように、店の中での会話、病院での会話、町中で道を尋ねるなど機能別の会話練習が多い。だが、スーパーやコンビニエンスストアーなどで無言のまま買い物ができ、道が分からなければ携帯電話のアプリケーションソフトウエアで簡単に行き方を調べることができる現在、学生達はこの機能別のオーソドックスな会話練習にあまり興味を示さない。実際に病院に行ったり、道を聞いたりした時に日本語で話してみたが、実際の会話は教科書通りには進まないので通じなかったという話もよく聞く。質問はできても、答えてくれた言葉が理解できなかったというケースは、日本語学習者のみならず、外国語を学習した者であれば誰でも経験していることであろう。教室

の外では、パターン化された言葉のやり取りは通じない。文法や文構造だけでなく、語彙や聴解の力も十分ではない初級レベルの学生が、学習している言語を実生活の中で使うのはとても難しいことである。

生の日本語を学習したいがために日本へやって来た留学生、特に初級後半から中級前半レベルの学生のための会話の授業で、教師として何を提供してあげるべきか試行錯誤を繰り返している。一年、あるいは、半年の滞在の間に、買い物や食事の場を楽しみ、日本人の友人達との交流を深めてもらいたいのである。

機能別の会話練習では、セールが始まる時期を見計らって、「売り切れ」「取り寄せ」「新作」「最新式」「一番人気」「口コミ」などの語彙を交えた会話練習をしたり、土産を買うであろう帰国の時期が近づくと「ご自宅用」「小分けの袋」などの言葉を紹介したりした。すると、学生は興味を示し、意欲的に会話練習に取り組むようになった。文型練習の度合いが高い会話練習になる場合は、日本語学習用の絵カードや写真教材ではなく、写真としても楽しめるような美しい風景やにぎやかな店先、かわいらしく設えられた部屋などの写真を利用した。すると、「言わなければいけない」から「言いたい」という意識に変わり、より活発に発言が飛び交う授業となった。しかし、絵カードなどの教材と比べ、情報がかなり過剰になるので、習った表現の中では言いたいことが言い表せないなどのマイナスの面も出るため改善しなければならない点もある。

機能別の会話の他に、日本人の友人と会話をするための練習時間も設けるようにしている。初級後半の学生には、「です」「ます」の丁寧形をきちんと習得させたいところであるが、普通形の復習、普通体を使った簡単な会話練習、助詞の省略、縮約形などの練習を行っている。ある日会話練習の最中に、ある学生が、日本人の友達に会った時に、どのように挨拶をして、その後でどんなことを言ったら、そこからちょっとした会話へと続けていくことができるのだろうとつぶやいた。

短期留学生のために会話のクラスに所属していた学生達が望んでいたものは、

・出会いの場面で使う表現のバリエーションの習得

・挨拶や呼びかけから、ちょっとした話に進展させるための技能の習得

この二点であった。学生達の最終的な目標は、「日本人のようにペラペラに話せるようになる」ことであるが、学生たちはまず、「挨拶や呼びかけだけで終わりたくない」「ただ聞いているだけでなく、少しでもいいから会話に参加したい」「ちょっとした話ができるようになりたい」という希望を持っており、それを実現させるために、毎週教室に通って来ていたのである。

そこで、彼等の希望に答えるべく、まず、十代から二十代の若者達を主な登場人物としている小説の中で、知人同士が出会った時に、どのような会話が交わされているかについて調査をすることにした。

2. 会話分析に関する先行研究

岡崎（1987）は、教室での学習が自然な会話に参加するにふさわしい訓練の場となっていない現状を指摘し、談話の指導を、読解・作文・聴解・口頭表現の四技能に準ずる重みを持つものと捉えている。欧米型の話し手中心の直接型・攻撃型の談話のあり方に対して、日本語の談話のあり方は聞き手の立場を重視したものであるとし、聞き手中心の談話指導の立場に立ち、初中級における実際のカリキュラムを提示している。

教室では、聴き、話す場は与えられているが、あらかじめ与えられた形式、タイミングを通して行うものであるため、実際の自由な会話の流れに参加する能力は、教室の学習では獲得できない。それは、構文、文法、語彙の不十分さによるものとは違う困難さである。また、日本語の会話に参加するためには、相手の話を理解し相づちをうち、自分の考えをまとめ、自分の意見を話すタイミングを判断し、言い間違えがあったら修正し、他

者の話を遡及しながら話を進めるという高度な言語活動が必要であるが、これは文化的背景の下で獲得してゆくものであり、無自覚に行っている母語の言語活動をそのまま使用することはできないとの論が続く。

岡崎が提示する談話指導は、聞き手一辺倒に陥ったままで会話を終わらせないことを第一とし、相づちによって会話に参加して会話のリズムの一部を構成すること、時宜にあった短い質問をすることによって会話の過程に参加すること、自分の話順を相手の話順に連結することなどを学習目標としている。

論考に提示されているシラバスによる指導の成果として、初中級の学生でも連文レベルの談話が構成できるようになったこと、自然な相づちがうてるようになったこと、話順の譲り合いや聞き手が発言しやすくなるような配慮が行えるようになったことなども報告されている。

寺村秀夫編「ケーススタディ日本語の文章・談話」(1990)の「会話の展開」の章では、会話は、話題を持ち出して会話を展開させている話し手と聞き役になっている聞き手によって構成されるものであると定義されている。そして、聞き手の発話は、更に「あいづちの発話」と「実質的な発話」の二つの機能に分けられている。

「あいづち発話」は、「聞いている」「言っていることはわかる」「その次を聞かせてもらいたい」という反応を相手に返すだけの機能であり、消極的である。一方、「実質的な発話」は、積極的に質問を発したり、相手の話に対して自分の判断や事実の叙述をしたりして、話し手に積極的に働きかける発話行為である。実際の会話では、話し手、相づちの発話を行う聞き手、実質的な発話を行う聞き手の三者が適宜役割交替をしながら、会話が進められていく。以上の論が、会話の実例を通して詳しく考察されている。

堀口(1988)でも、日本語でのコミュニケーションにおいて、話し手が

話を進めていくためには、聞き手の積極的な言語行動が重要な働きをしており、日本語教育においては、「聞く」ことは消極的、受動的なものではなく、積極的な行動として捉えるべきであると論じられている。

「聞く」ことは、理解し、解釈し、考え、想像し、推測するという積極的言語行動であり、非言語的な「笑い」「頷き」や、言語的な「相づち」「質問」「応答」などの形態をとる。話し手が話を進めていくためには、これらの聞き手の反応や助け、働きかけなどの言語行動が話を進展させてゆくうえでの重要な役割を担っている。話し言葉によるコミュニケーションは、話し手の積極的な言語行動だけではなく、聞き手からの反応や積極的な参加なくしては成立しないものであることが説かれている。

堀口論文では、聞き手の言語行動である、相づち、先取り、確認、応答、助け、質問、展開、転換などの中から、相づち、先取り、確認の 3 つの行動について、その機能と形態についての考察がなされている。

相づちの機能は、まず、相手の話を聞いているという信号であり、また、理解しているという信号、同意の信号、否定の信号、感情の表出（驚き、喜び、悲しみ、怒り、疑い、同情、いたわり、謙遜）でもある。相づちの言語行動には、感動詞「ハイ」「ウン」、副詞「ナルホド」などの発話、繰り返し、言い換えの三つの形がある。繰り返しは、聞き手が、関心を持った部分を表明する働きもしており、言い換えは、理解していることを示す役割も果たしている。

先取りは、話し手がこの先言おうとしていることを予測できたという信号である。聞き手が先取りをして発言することによって、話し手に、言いにくい部分を言わなくて済むようにさせることも可能であることから、コミュニケーションを円滑に進める有効な手段ともなっている。ただし、話し手と聞き手の共有する知識や経験の有無や差によって、聞き手が先取りしたものが、話し手の言わんとしていたことと一致しないこともある。

確認は、聞き取れない部分、知らない語、意味が曖昧に感じられた部分

の確認行為である。この確認の発話は、同時に理解の信号ともなる。日本語学習者にとって、この確認の発話は、相互理解をしながらコミュニケーションを継続させるための非常に大切な言語技術であると言えよう。

また、堀口は「日本語教育と会話分析」(1997) の著書において、会話が始まる場面を以下の四つに分類している。

①知らない人で聞き手になる可能性のある人への話しかけ

②知っている人で聞き手になる可能性のある人への話しかけ

③知っている人で聞き手になる用意のない人への話しかけ

④知らない人で聞き手になる用意のない人への話しかけ

①は、役所やデパートなどで案内係に尋ねる場面、電話による問い合わせなどの場面であり、機能別の会話教材で学習することができる。②は、話しかけたり、話しかけられたりすることが自然にできる場面であり、家族旅行の宿での家族の会話の場や結婚式の親族控え室で親類が待っている場などがこれに当たるとの説明がある。③は、前を歩いている友人などに声をかける場合などである。話し手は、相手の名前を呼んだり、距離によっては挨拶をするなどして、会話の場作りを始めることができる。④は、すれ違った人に道を聞く場合などである。

当論では、たまたま出会った友人と、ちょっとした会話ができるようになりたいという学生の願いを受け、この③の場面における会話の調査を行うこととする。

上記したそれぞれの四つの場面は、更に、コミュニケーションの場作りをしてから会話が始まる場合と、場作りなしでいきなり会話が始まる場合とに分けられている。

場作りをしてから会話を始める方法として、次の四つの手段があげられている。

・「あ」「やあ」「よお」「あのう」「ねえ」などの言葉によって相手に働きかける方法

・「ああ」「あら」などの言葉によって自分の気持ちを表出する方法
・「あの」「ええと」などの言葉によって話し手になる意志があるということを示す方法
・呼称による呼びかけや「おはようございます」などの挨拶や「すみません」などの呼びかけによって相手の注意を自分の方に向けさせる方法

この四つの方法は、「あ、田中さんおはようございます。」など、組み合わせて使われることが多い。

場作りなしで始められる会話は、質問から始まる会話と叙述から始まる会話とに分けられる。質問から始まる会話には、「相手のことについての質問」「相手の意見についての質問」「一般的なことについての質問」の三つのパターンがある。

叙述から始まる会話は、「相手について述べる」「自分について述べる」「天気について述べる」「周りの状況や物事について述べる」「特定の事実について述べる」「一般的なことについて述べる」など、多くのパターンがある。この分類方法や名称については、当論の調査結果を分類する際に参考にさせていただいた。

3. 調査対象の小説

小説の中から、偶然に出会った知人同士が交わしている会話を抜き出し、分類調査を試みた。

会話の授業にフィードバックさせたいという思いから、調査対象の小説は、十代から二十代の若者が主な登場人物であることを条件とした。また、時代に合った表現で書かれているであろう 1990 年以降に初版が出版された小説で、比較的会話表現が多いものを選んだ。

今回調査した小説中の会話表現は、「うん」「ああ」「へえ」などの相づちの言葉があまり多くないので、当論では相づちについては扱わないこととした。

4.　出会いの場で交わされる表現

4-1.　互いに偶然出会った場面での第一声

小説では出会いの場面が省略され、いきなり会話の途中から場面が始まっていることが多いが、以下のような例を抜き出すことができた。

呼びかけ	よお／よう（3） やあ（2） おう／おうッ（2） あれ（3） あ（1）
呼びかけ ＋ 名前	よう／よぉ＋名前（2） やあ＋名前（2） おーい＋名前（1） お＋名前（2） ん＋名前＋か（1） あっれえ＋名前＋じゃん（1） ああ＋やっぱそうじゃん＋名前＋でしょ（1） あら＋名前（1） やだ＋名前＋じゃない（1）
名前	名前（14） 名前＋ですよね（1） 名前＋じゃない（1） 名前＋じゃないの。久しぶりだね（1）
呼びかけ ＋名前 ＋その他	おう＋名前＋久しぶり！すごい格好だな！（1） おい＋名前＋何やっとるんだ（1） やあ＋名前＋こんなところにいたんですか（1）
挨拶	昨日はどうも（3） おっ、昨日はどうも（1） 久しぶり（だね）（2） 久しぶりだな。元気か？（1）
挨拶 ＋ その他	おはよう＋名前（1） こんにちはー。暑いですね（1） こんにちは。おば様、ご無沙汰しています。ご機嫌はいかがですか（1）
前置き	ちょっといいかな（1）

質問	何やってんの？（1） 何してんの？（2） どうしたの？（1） ちょっと、どうしたの？こんなところで何してるんだ？（1） 食事にいかないのかい？ あら、あなたたちも野球部の応援？へえ、感心ね おッ、なんやねん、生徒会長。そないに急いでどこいくんやー？
叙述	歩くの遅えええ！
動作のみ	（ポンと肩を叩く） （後ろから肩を叩く） （後ろから相手の顔をのぞき込む） （笑顔で近づく）

（カッコ内の数字は出現回数を示す。）

会話を始める場作りをしているケースの方が、場作りをしないで会話を始めるケースより多いことは一目瞭然である。相手の名前を呼ぶことから会話が始まる場合が一番多く、次に呼びかけをしてから名前を呼ぶ場合、呼びかけだけの場合、「あれ」「あ」などの感動詞を使って相手の存在に気づいたことを表している場合が続く。

そして、やはり、「おはよう」「こんにちは」などの挨拶で始まる会話がかなり少ないことも確認することができる。今回の調査で「おはよう」や「こんにちは」などの挨拶が用いられている場は、年上の知り合いや近所に住んでいる人と出会った場、なじみの店に入る場などであった。

A:「こんにちは！」
B:「あ、い、いらっしゃい。」[**陰陽屋**]

A:「こんちは！」
B:「なんでぇまた来たのか。」
A:「ひどいなぁ、お客なのに。」
B:「てめぇに売る本はねぇぞ。」[**バンドワゴン**]

A:「いらっしゃいませ。」
B:「こんにちは。」「来ちゃった。」
A:「…う。」「まあ、来るだろうとは、思ってた。」[**彼女**]

A:「こんにちは、おばさま。ご無沙汰しています。ご機嫌はいかがですか。」
B:「まあ、桜井さん、久しぶりね。ええ、とても元気よ。」[**殺意**]

A:「こんにちはー。暑いですね。」
B:「こんにちは。ほんとに暑いですね。そうだ、この前は笹かまぼこ、ありがとうございました。おいしかったー。」[**陽だまり**]

今回の小説には、「おはよう、今日は寒いですね／暑いね。」などの会話例はなかったが、朝の挨拶である「おはよう（ございます）。」や、真夏や真冬の天候が厳しい折の「暑いですね。」「今日は寒いね。」や「いい天気になってよかったね。」などの天気・天候に関する挨拶表現は、普通によく使われている場作りの表現である。

「こんにちは」に関しては、友達同士の会話ではあまり使われないことを頭に入れておきたい。「こんにちは」に関連した表現として、「またお会いしましたね。」「今日は何度も会いますね。」などの表現を紹介することも必要だろう。

声がけをせずに、肩を叩いたり、近づいて行ったりすることによって、相手の注意をひこうとするケースも四例あった。この肩を叩くという身体に触れる行為は、かなり仲が良い友人同士の間でのみ可能なものであるため、会話練習に組み込む場合は、注意が必要である。

4-2.　小説中の会話表現に見られる、話題を展開させる発話の分類

次に、話を始める場作りの会話の後で、どのような会話が続けられているかについて分類する。会話が始まってからあまり時間が経過していないうちに発話されているものをピックアップしてみた。

〈相手の最近の様子を聞く〉

・「最近、陰陽屋の方はどう？」[**陰陽屋**]

・「今はどこで何しているの？」[**陰陽屋**]

・「で、どうなのよ、新婚生活は？」[**陰陽屋**]

・「ところでこの間ちらっと噂を聞いたんだけど同棲してるんだってな。」[**パラレル**]

・「そっちのほうはどう？はかどってる？」[**パラレル**]

・「研究のほうはどう？忙しいかい。」[**パラレル**]

・「正真正銘、久しぶりだな。元気だったかい？」[**パラレル**]

・「うまくいってるかい？あいつとは、その後も。」[**パラレル**]

・「仕事のほうはどうだい？順調に進んでるのか。」[**パラレル**]

・「で、ハンガリー語の方はどう？」[**僕ら**]

〈相手の今の様子を心配する〉

・「今日は元気がないね。どうかしたの。」[**陰陽屋**]

・「寝不足なの？」[**陰陽屋**]

・「今日もよく寝てたね。店長さんの特訓ってそんなに厳しいの？」[**陰陽屋**]

・「沢崎ってよく学校で居眠りしてるけど、夜あんまり寝てないの？」[**陰陽屋**]

・「なんて顔してんだよ、おい。」[**陽だまり**]

・「どうだい具合は？」[**パラレル**]

・「ちょっとどうしたの？」「まさか、だれかにキューブを壊されたの？」[**退屈**]

〈相手の今の状況を質問する〉

・「こんなところで何してるんだ？」[**陰陽屋**]

・「どこにいたんだ？」[**パラレル**]

・「こんなところでなにやってるの？」[**退屈**]

・「あれ？まだ帰ってなかったの？」[**退屈**]

〈相手の予定について尋ねる〉

・「沢崎君、狐の行列（に参加する件）はどうなった？」[**陰陽屋**]

・「送別会にはでるんだろう？」[**パラレル**]

〈相手の今の状態・状況への感想・評価〉

・「すごい格好だな！」[**陰陽屋**]

・「元気だったか。ずいぶんと髪を伸ばしたんだな。」[**陰陽屋**]

・「うわ、本当に（狐行列のためのメイクで）狐みたいだ。」[**陰陽屋**]

・「あのさあ、こないだと、感じが違うね。」[**僕ら**]

〈相手をほめる〉

・「その狐耳、けっこう似合ってるね。」[**陰陽屋**]

・「うん、本当に沢崎君の狐耳、かわいいね。」[**陰陽屋**]

・「ウチの内部ではお前もわりと評価されてんだよ。」[**陽だまり**]

・「一位おめでとう。さすがだな。」[**パラレル**]

〈共通の知り合いの様子や消息を聞く〉

・「山崎先生は元気。」[**陰陽屋**]

・「あのさ、槙原さんは祥明とは長い付き合いなんだよね。」[**陰陽屋**]

・「なあ真由子、友彦のこと、覚えているかい？」「あいつが今どうしてるか、知ってるかい？」「あいつ今、アメリカにいるらしい。ロサンゼルスの本社だ。」[**パラレル**]

〈同行者について尋ねる〉

・「そちらの方たちは？」[**陰陽屋**]

・「あれ、あれだよねぇ、奥田？なに、付き合ってんのぉ？」[**陽だまり**]

・「をを、誰だそのすごい美人はぁ！」[**夏**]

〈過去の事実や出来事について聞く〉

・「あのあと、由実香ちゃんの相談はどうなった？」[**陰陽屋**]

・「委員長も（大晦日に行われる狐の行列の祭りに）行ったことあるの？」[**陰陽屋**]

・「おまえはなぜ（研究発表会で）発表しなかったんだ。」[**パラレル**]

〈過去の出来事に対する感謝や謝罪〉

・「宮内さんから聞いたよ。一緒に群馬まで探しに行ってくれたそうだな、ありがとう。」[**陰陽屋**]

・「そうだ、この前は笹かまぼこ、ありがとうございました。おいしかったー。」[**陽だまり**]

・「今朝はごめんね。」「みんなの手伝いができなくて。」[**退屈**]

・「おっ、昨日はどうも。」[**Q10**]

〈自分の気持ちを述べる〉

・「いいでしょ？そこの美容院で二百円でやってくれるの。」[**陰陽屋**]

・「でもさぁ、あの講師の先生、けっこうカッコよくない？」[**僕ら**]

・「やっぱ真緒だよ。うっわ、なつかしー。」[**陽だまり**]

〈自分の近況を述べる〉

・「今日、ちょっと面白いことがあったんだ。」[**パラレル**]

・「ボク、（人生が）終わりました。」[**Q10**]

・「オレ、再手術することになった。」「来年も二年だよ、オレ。」[**Q10**]
・「入院、決まった。」[**Q10**]

〈天候・季節について〉

・「こんにちはー。暑いですね。」「こんにちは。ほんとに暑いですね。」[**陽だまり**]

（カッコ内の言葉は筆者が便宜的に補ったものである。）

相手の近況を尋ねたり、今の様子を心配して声をかけることで会話が始まるパターンが多いが、その他にも様々な発言がされており、話の内容はヴァリエーションに富んでいる。実際の会話では、相手の様子をうかがいながら、これらの話題の中からその場にふさわしい表現を瞬時に選び、正しく話さなければならないので、初級から中級前期レベルの学生には、やはり簡単な発話行為ではないだろう。そのため、会話の授業では、やはり、呼びかけの後に続くことが多いこれらの会話のパターンを提示し、練習させる必要がある。しかし、その際、なるべく発話の自由度が高くなるような練習のさせ方をすることが大切であろう。

5. まとめ

それでは、初級から中級前期レベルの留学生は、限られた語彙や文法の運用力の中で、日本人の友人にどんな発話をすることができるであろうか。

例えば、「パーティー」をキーワードにすると、「昨日のパーティーは楽しかったね」「パーティーに誘ってくれて、ありがとう」「途中で帰ってしまったけれど、あれから二次会へ行ったの」「二次会のカラオケで何を歌ったの」「週末のパーティーに行くでしょう」「一緒にいかない」「何を持って行ったらいいと思う」など、初級レベルの語彙や文法力で話せる発話は少

なくない。

また、2 時半頃キャンパスを歩いている友人に会ったという設定を設けるなら、「もう帰るの？」「これから授業？」「昼ご飯食べた？」「今日もサークルの練習があるの？」などの会話が考えられる。同じ人で、姿格好が違う二枚の写真を用意し、友達の外見や様子がいつもと違うという設定をすれば、「それ、新しいかばん？」「あれ、髪型変えた？」「今日はスーツを着てるけど、何かあるの？」「今日は、かっこいいね」「今日はどうしたの。元気がないね？」などの話しかけもできる。初級後半から中級前期のレベル学生でも、ちょっとした会話のための場作りをすることは十分可能であるのだ。

しかし、会話を続けていけば、聞き取れない、言葉の意味が分からない、話し手の言いたいことが理解できないなどといった様々な困難に直面し、それに対処しながら話に参加し続けなければならない。そのためには、聴解力や語彙力を上げるだけではなく、話の流れの中でスムーズに話し手に確認行為を行うといったスキルも身に付けなければならない。これらの問題については、また改めて考察をしたい。

最後に、今回調査した小説の会話表現には、あまり言語的な相づち表現が見られないので、相づちに関しては取り上げないことは先に述べた。小説では、会話文の間に地の文が入り、話し手や聞き手の気持ちや互いの反応を叙述していることが多いため、言葉としての相づちを入れなくても会話が自然に進んでいくのである。

そこで、小説ではなくテレビのドラマシナリオを一冊用意し、相づちの使われ方を調べてみることにした。シナリオ形式で書かれているため、相づちの言葉が多用されていると想定していたのだが、予想に反し、このドラマのシナリオの中では、特に「うん」「へえ」「そうなんだ」などの相づちの言葉があまり使われていない。しかし、会話はスムーズに進んでいるのだ。

H:「久保ッ！」
K:「おう。」「今日の（学校での出来事）、笑えた。」
H:「（笑う）」
K:「入院、決まった。」
H:「いつ？」
K:「明日。」
H:「明日かぁ。」
K:「（ため息）またみんなに迷惑かけちゃうんだろうな。」
H:「（立ち止まる）」「（振り返る）」「…覚えてる？世界を滅亡させようと思った夜。」［**Q10**］

K:「（笑顔で近づく）」
T:「（会釈するが、ぎこちない）」
K:「もしかして、アレかな？」
T:「（見る）」
K:「ネットの悪口？」
T:「知ってるんだ。」
K:「直接見てない。ここ来たヤツの噂。ほら、赤毛の子って、他にいないから。」
T:「……。」
K:「あんなの、勝手に言わせておけばいいじゃん、そのうち、みんな、飽きるって。」
T:「…このこと、私に面と向かって言ったの、久保君だけだ。みんな知ってるくせに、誰も何も言わない。」
K:「……。」
T:「声出して言ってくれないから、私、違うって言えないんだよね。」
K:「……。」
T:「言えないのに、ウソの私がどんどん作られていってー。私、どこで言えばいいんだろう。そんな人間じゃないんだって、私、誰に向かって言えばいいんだろう。」［**Q10**］

相づちの言葉はあまりないが、話し手と聞き手の表情や動きが相づちの働きをしていることが想像できる。つまり、非言語としての相づちが多く用いられているのである。時々、会話練習の最中に、学生が会話の文を作ることに必死であるあまり、無表情で「へえ、そうなんですか。」「それは大変ですね。」と棒読みをして、クラス中を笑せることがある。自然な相

づちをうつためには、言葉の抑揚や声の強弱、話す速度、そして、表情や身振りなどの非言語的な相づちも同時に行わなければならないことがわかる。数ある相づちの言葉や表現を覚え、それを正しいタイミングで、正しく使うのは難しいことである。適当な相づちの言葉が思い浮かばなければ、表情で「理解している」「自分もそう思う」「ちょっとわからない」などの意思表示をすることもできるのだ。このドラマシナリオから、非言語的な相づちの教育もまた大切であることを再認識した次第である。

用例資料

村山由佳「僕らの夏」（集英社文庫 2000 年）［**夏**］
村山由佳「彼女の朝」（集英社文庫 2001 年）［**彼女**］
東野圭吾「パラレルワールド・ラブストーリー」（講談社文庫 1998 年）［**パラレル**］
東川篤哉「殺意は必ず三度ある」（光文社文庫 2013 年）［**殺意**］
天野頌子「よろず占い処　陰陽屋へようこそ」（ポプラ文庫ピュアフル 2011 年）［**陰陽屋**］
平山瑞穂「あの日の僕らにさようなら」（新潮文庫 2013 年）［**僕ら**］
越谷オサム「陽だまりの彼女」（新潮文庫 2011 年）［**陽だまり**］
朝井リョウ「チア男子！！」（集英社文庫 2013 年）［**チア**］
初野晴「退出ゲーム」（角川文庫 2010 年）［**退出**］
小路幸也「東京バンドワゴン」（集英社文庫 2008 年）［**バンドワゴン**］
木皿泉「Q10 シナリオ BOOK」（双葉社 2011 年）［**Q10**］

参考文献

寺村秀夫編『ケーススタディ　日本語の文章・談話』（おうふう 1990 年）
堀口純子『日本語教育と会話分析』（くろしお出版 1997 年）
岡崎敏雄「談話の指導―初～中級を中心に―」（「日本語教育」62 号 1987 年）
堀口純子「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」（「日本語教育」64 号 1988 年）
中井陽子・大場美和子・土井眞美著「談話レベルでの会話教育における指導項目の提案―談話・会話分析的アプローチの観点から見た談話技能の項目」（日本語教育論集「世界の日本語教育」14 号　2004 年）